

二〇一五年一〇月九日

紅葉溪へと迫り出せるカフェテラス
電柵に触れてはならじ栗拾ふ
夫のもぐ柿をタモ網伸ばし受く
登高のわれを誘ふ鳶の笛
彩窓の聖母子像へ紅葉照る
短冊のホ句諾ひつ萩愛でる

二〇一五年一〇月八日

木犀の香に誘はれて庭に立つ
句座和む沢に摘みきし草の花
うららかや自転車籠に犬眠る
炉辺に酌む熊の毛皮に胡座かき
鯛焼きを食ぶ私らは尻尾から
接岸のフェリーにしぶく秋の潮
玉の陽の紅葉明かりや夢舞台
水鏡の朱き吊り橋秋澄める
山荘のテラスの足下紅葉濃し
落暉いましかめつ面の案山子翁

二〇一五年一〇月七日

蒼天へ切り立つ嶺を鳥渡る
秋風に絡みどほしや恋の絵馬
日向ぼこ影絵にじやる子猫かな
ウオーキングの影は脚長秋入日
石庭の箒目乱す野分かな
まなかひに富士見ゆ軒端柿吊るす
草の花もちよりて活く里の句座

二〇一五年一〇月六日

大甕へ婆娑と投げ入れ秋桜

菜々

うつき

よし女

治男

菜々

ひかり

あさこ

満天

よし女

なつき

ともえ

よう子

智恵子

さつき

菜々

さつき

宏虎

なつき

智恵子

こすもす

豆狸

智恵子

かず

明日香

東雲の空一面にうろこ雲

紫蘇の実をしごけば畑の匂ひ立つ

禅寺の枯山水に色鳥来

投句箱溢るるほどや小鳥来る

椅子の背に凭れわたしは秋の人

二〇一五年一〇月五日

秋天へ切っ先立てし奇岩かな

磯菊の左右に雪崩るる切通し

城濠に相打ち倒れ枯蓮

朝顔のおちよばにすぼむ日暮れ時

零点の句会帰りの秋思かな

二〇一五年一〇月四日

図書館の窓辺に釣瓶落としの日

通過する電車にゆるる秋桜

爽やかや靴といふ靴磨きあげ

走り根に跳ねあらぬ辺へ木の実落つ

結界のロープに止まる赤とんぼ

沈みさうなる山盛りの蓮根舟

二〇一五年一〇月三日

愛犬と肩並べ見る良夜かな

酢橘もぐ指刺す棘にひるみつ

太極拳スローモーション秋天下

秋澄みて石山の石なほ白し

秋晴れや杖を供とす足軽し

花頭窓打ちては萩の揺れやまず

智恵子

よし女

豆狸

宏虎

菜々

かず

智恵子

ともえ

智恵子

なつき

さつき

豆狸

菜々

ぼんこ

明日香

かず

さつき

菜々

有香

かず

あさこ

智恵子

毎日句会みのる選・二〇一五年一〇月二日